後記

本年平成二十四年三月をもって、林達也先生が退任される。本号、『駒澤國文』第四十九号は、先生の御退任記念号として編まれた。林先生は昭和六十一年（一九八六年）、乙葉弘先生の後任として東京外国語大学より駒澤大学に赴任された。以来二十六年の長きにわたってカリキュラム改革など国文学科への寄与はもとより、全学教授会委員等の任にあって文学部の運営を支え、さらには学生部長、図書館長、仏教文学研究所所長として、大学の発展のために多大の貢献をなされた。激職にありながら学生の指導にも手厚く、またサッカー部部長として同部を牽引され輝かしい成果をもたらされてもおられる。

林先生は近世文学、とりわけ中・近世和歌研究の世界でも第一人者としてご活躍され、和歌文学会の事務局校を引き受けられるなどの指導的立場を果たされたが、その御研究は今後もさらに発展されてゆかれるであろうし、後進の研究者を導く優れた指針としてご活躍されるであろう。本号に稿を寄せられた伴野英一氏、伊藤達氏氏は林先生の薫陶を得た新進の研究者である。両氏を含め、本号に稿を寄せられた諸先生、諸氏に厚く御礼申し上げる。

本号に寄せられた「縁に導かれて」と題された林先生の玉稿は、わたしたちの接し得た先生の像がほんの一部でしかなく、先生の包蔵するものの深さ、広大さを垣間見させて下さるものであった。一時体調を崩されながらも見事に復帰され、明晰で鋭い判断と闊達な気風で国文学科を導いて来られた先生が退任されることは、この上もなく寂しく惜別の思いに耐えない。先生にはご健康に留意され、御退任後もわたしたちを導いてくださるよう切にお願い申し上げる次第である。

今年度の国文学大会は、東京大学名誉教授・成城大学教授の小島孝之先生に、ご講演いただいた。〈文学研究の楽しさは謎解きの楽しさ〉というお話に学生たち聴衆は魅了され、説話文学の奥深い世界に誘われた。

最後になったが、昨平成二十三年七月、村上光徳先生が逝去された。村上先生は在職三十九年の長きにわたって国文学科の支柱であられ、学問研究の、また人生の大先達であられた。矍鑠としたそのお姿はいつお見かけしてもお変わりなく、今なお御逝去が信じがたい。先生の御冥福をお祈りするとともに、これまでに賜わった御教導に深く感謝申し上げます。

（K）

編集委員　勝原　晴希
　　岡田　豊